

981116(6-MOKUTEKI)

## 第6章 目的化されるスポーツ：現実社会との接点

## 6.1 緒言

前章では非現実的な社会の接点として、夢想化されるスポーツ・イメージという方向に向けて解釈を進めた。本章では逆に、現実的な社会との関わりのベクトルにおいてスポーツのイメージ化について検討する。

ホイジンガやカイヨワの遊戯論に依拠して、「スポーツは遊びの要素を持ち、本来は非日常的活動であって、それ自体を楽しむために行われるものである」というように、遊びの非日常性や無目的目的性をスポーツはその特徴として持っていることと主張されることが多い（注 1）。このような命題は現在でも成立しうるのだろうか。つまり現実に行われているスポーツ事象に対して、このような命題が当てはまるかどうか疑問の余地がある。現代のほとんどの人は「何かのためにスポーツをする」というように何らかの目的を持ってスポーツを実践している人が多いと思われる。例えば、「健康のために運動をする」「痩せるためにジョギングをする」「自分の可能性や限界に挑戦するためにスポーツをする」「家族のふれあいを求めてスポーツする」「仲間づきあいのためにテニスやゴルフをする」あるいはトップレベルのアスリートのように「国のために走る」など、様々な目的のためにスポーツを実践している人が多いように見受けられる。ストレス解消、健康の保持増進、減量や気晴らし、あるいは仲間づきあいといったように、スポーツする目的は多様であると考えられる。このような目的を動機としてスポーツの入り口に立ち、そのうちに内在的なスポーツする価値に目覚め、スポーツすること自体が目的となっていくと考えることもできる。

ところで、1996年アトランタ五輪の女子マラソンでは、上位3人の選手には3人3様のオリンピックで走るための目的があったと言われている。優勝したファツマ・ロバ選手は「国のために走った」、2位のエゴロワ選手は「家族のために走った」、3位の有森選手は「自分のために走った」とそれぞれテレビのインタビューで答えていた。世界のトップランナー達でも走る目的は人によって様々なのである。このようなスポーツする目的への問いは、実はスポーツの価値論・目標論、あるいは形而上学的な問いに通ずるものである。

それでは、映像の中のスポーツでは一体どのような目的が映し出されているのであろうか？その描かれている時代の感性を記録にとどめながら、スポーツ映像はどのような目的

を正当化し、観る人々に訴えかけているのであろうか？このような疑問に答えようとするのが本章での分析・記述・解釈の課題である。スポーツ映像を観た観客たちが感動するのは登場人物たちの人生の生き様のドラマであるとしても、そのような生き方はそこに描かれているスポーツにまで反映されていると考えることが必要である。観客に感動を呼ぶには、上述したような日常的で一般的なスポーツの目的では映画の題材としては弱すぎて、観客に訴えかけるものが何もなくなる。映像のストーリーとして観客たちにインパクトを与え、心の奥底から震撼させるためには、それなりに映画としての表現形式と内容が存在していると考えたほうが自然であろう。かくしてスポーツ映像として取り上げられる題材は、(1)既に周知のヒーローや伝説のヒーロー達、あるいは(2)現代社会にインパクトのある告発的なテーマを含んだもの、または(3)不屈の闘志を持って不遇な状況から再度立ち上がる人間の強固さや自己の存在証明、といったようなものが好まれることになる。周知のヒーロー像としては、例えば『炎のランナー Chariots of Fire』(Hudson, Hugh 監督, 1981)のハロルド・エイブラハムズとエリック・リデルや『打撃王 Pride of Yankees』(Woods, Sam 監督, 1942)のルー・ゲーリッグが思い浮かぶ。社会告発的なものとしてはドーピング批判映画『フィニッシュ・ライン Finish Line』(Nicoletta, John 監督, 1989)や人種差別と闘う"The Jackie Robinson Story"(Green, Alfred, E. 監督, 1950)などが思い当たる。不遇から再起して自己の存在を確認するハッピーエンドものとしては、『ロッキー』シリーズや片腕の大リーガー『大リーグへの道：A Winner Never Quits』(Damski, Mel 監督, 1986)のピート・グレイなどが該当すると思われる。

本章では、「何のためにスポーツをするのか」という問いの中でも「何のために走るのか」という陸上競技を中心に据え、それに上記の三つのレベルの題材範疇を基に、次の6作品を中心的な映像として選定した。

(1) 社会との接点としての社会階層を表現する2本の英国作品：『炎のランナー Chariots of Fire』(Hudson, Hugh 監督, 1981)および『長距離走者の孤独 Loneliness of the Long Distance Runner』(Richardson, Tony 監督, 1962)

(2) 1980年代の右肩上がりの高度経済成長時代の社会状況とそこに抱えている問題点を映し出す映画2本の作品：『フィニッシュ・ライン Finish Line』(Nicoletta, John 監督, 1989)およびハードル走とアメリカン・フットボールを題材にした『熱き瞳のままに：炎のタッチダウン Unconquered』(Lowry, Dick 監督, 1989)

(3) 自己の存在証明やアイデンティティの確認としての 2 本の作品：『マイ・ライバル Personal Best』(Towne, Robert 監督, 1982)および『ロンリー・ウェイ Running Brave』(Everett, Donald S 監督, 1983)

これらの作品はカテゴリー的に重複する内容も含んでいることも事実である。そのため分析・記述・解釈を進めていく際に互いに越境しあうことがあり得る。本章では特に『炎のランナー』を中心的に検討する。その理由は、主要登場人物 4 人によって四つもの主要な走る目的が表現されているからである。現代スポーツの問題状況が告発的に表現されているその他の作品によって、スポーツする目的の表現を補完していく。こうして、これらのスポーツ映像に表現されているスポーツする目的、特に「何のために走るのか」という目的は観客に正当化されて受容され、スポーツの強固なイメージを形成していくことになる、ということを確認していくことにしたい。

## 6.2 スポーツ目的のテキスト化：何のためにスポーツするのか

### 6.2.1 何のために走るのか：『炎のランナー Chariots of Fire』における社会的関与

先ず、上流階級の人々のスポーツする目的について『炎のランナー Chariots of Fire』(Hudson, Hugh 監督, 1981)を題材に検討を進める。この映画は 1924 年の第 8 回 パリ・オリンピック大会を舞台にして、ハロルド・エイブラハムズとエリック・リデルという実在した主人公 2 人が、それぞれ「ユダヤ人差別を見返すため」「神の喜びのため」に走ったとされているものである(舛本, 1997a)。この 2 人の主人公はともにエリート大学生である。ハロルドはケンブリッジ大学、エリックはエジンバラ大学の学生である。当時の英国のエリート達は陸上競技やクリケットをたしなんでいた。特に短距離をエリート達は走っていたのである。

映画『炎のランナー』は 1981 年度アカデミー賞で 4 部門の受賞に輝いているが、現在でもスポーツ哲学やスポーツ史の領域などで様々なテーマの教材として利用されている。例えば、スポーツの価値、スポーツと人種差別、スポーツと階級制、スポーツと宗教などを学ぶ教材としてである。このように、この映画には、スポーツの本質やスポーツと人生観などに関連して多くのテーマを含んでいるため、今なお観る人達の心を惹きつけるものがあるといえよう。しかしながら、この映画に関する研究は、映画評論家のものを除き、ほとんど行われていないのが実状である(注 2)。しかも、これらの研究の主たる関心は、

哲学的、象徴論的なものではなく、歴史的、映画論的なものが中心であるといつてよい(注3)。ただし、杉本(1995)がこの映画に対し、彼らにはそれぞれスポーツする大義名分が必要であったと指摘しているように(pp.50-55)、スポーツする目的に関連した社会学的な観点からの指摘が見られることも注目に値する。しかしながら、スポーツする目的への分析は今ひとつ不十分であるといえる。

この映画の簡単なテキスト記述に移ることにする。ここでは以前にこの映画を解釈したテキスト(舛本, 1995)および Weatherby(1981)と安彦(1989)のテキストを活用する。『炎のランナー』という映画には、ユダヤ人蔑視と闘うケンブリッジ大学のハロルド・エイブラハムズ、神のために走り安息日には決して走らないプロテスタント派宣教師のエリック・リデル、という2人の主人公が登場する。ハロルドは、鼻持ちならないケンブリッジ大学当局のアマチュアリズムやエリート主義に抗し、プロのコーチ、サム・ムサビーニとともにトレーニングを続ける。彼は1924年のパリ・オリンピック大会で100m走で金メダルを勝ち取るが、勝利した後に虚脱感に陥る。そして寂しく帰国し、ひっそりと愛する彼女であるシビルの出迎えを受ける。一方、エリックは敬虔なスコットランド教会の宣教師であり、戒律の厳しい生活を送る。彼は安息日の日曜日にラグビーをしていた子ども達に諭す。「安息日にラグビーをしてもいいのかな?」と。エリックのトレーニングは、大自然の野山を駆け回り海岸線を白馬のように疾走するように、自然志向として描かれている。彼は100m走の予選が安息日である日曜日に予定されたため、頑迷に出場を固辞するが、リンゼイ卿が譲ってくれた400m走に出場して優勝する。エリックの勝利の歓喜の様子は、ケンブリッジ大学のランナー4人に肩車されるシーンとして映し出される。

この映画に対し、アメリカでどのような批評が典型的なものであったかを確認するために、映画批評として定評のある New York Times の評論を引用しておくことにする。

この映画は、… 1924年のオリンピックで、神のため、国王のため、国家の栄光を讃えるために走った2人の英国の陸上競技のスター選手たちの話である。一人は、非常に闘争心にあふれる若き英国ユダヤ人でありケンブリッジ大学の学生であるハロルド・エイブラハムズである。もう一人は、若くて敬虔なスコットランド教会の宣教師であるエリック・リデルである。彼は何故走るかを説明するところで次のように語る。「神は敬虔なわれをつくりたもうた。そして速い足も授かった」と。エリックは神の御名のために走った。ハロルドは、英国で財をなしたリトアニア人の移民の息子であるが、ユダヤ

人であることに気づかぬふりをするアングロサクソン社会で頭角を顕わし、見返すために走るのである (New York Times, September 25, C14:4, 1981.)。

この映画評に見られるように、この映画の二つの主題が第1に人種差別へのあくなき闘い、第2に宗教的信念に基づいた強固な生き方であるという見方は、いささか単純でナイーブすぎるといえよう。しかしながら、ほとんどの映画評がその立場をとっているのである(注5)。この映画には、それ以上に多くの象徴的でメタフォリカル(隠喩的)な意味が含まれているのである。

#### 6.2.1-(1) ハードル・シーンのメタファー

さらに、一層深い次元でランニングのメタフォリカルな意味を解釈するために、リンゼイ卿の自宅でのハードルの練習シーンに着目してみたい。そのことによって彼らの走る目的が一層明るみに出されることになるからである。Bergan(1982)はこのシーンについて「若き貴族のアンドリュー・リンゼイは、なみなみとつがれたシャンペングラスを乗せ、それをこぼさないようにハードルを跳ぶ」(p.105)と、ごく簡単な解説しかしていない。これを典型として、このシーンの象徴性に言及した映画評論家はほとんど見られない。このハードル・シーンは、実はこの映画の中の登場人物たちの生き様と関連づけることによって、より深くその意味を解釈することができ、そのことによってスポーツする目的も理解できやすくなる、という仕掛けであると見なすことが適当である。特に、このシーンでは映画的な表現形式としてリンゼイ卿は主人公達の障害を引き立てる媒介者としての役割を担っていると考えられるのである。

映画の中の主要人物達は「何のために走るのか?」ということに関して、それぞれの立場を表明している。リンゼイ卿はハードルの練習をする際に「楽しみのために走る」とハロルドの彼女であるシビルに語りかける。ケンブリッジ4人衆の1人であり、ハロルドの友人でもあるオーブリー・モンタギューは「両親のために走る」と独白する。リンゼイ卿にとって、走ることは遊びにすぎず、自分自身のために彼は走り、そして400mハードル走で2位になったのである。オーブリーはパリに向かう船上で「父と母のために走る」と手紙を書くが、3000m障害走(steeple chase:これ自体がハードルの障害と水壕の障害からなるハードル走である)では惨敗してしまう。映画の中で描かれるこれらのハードル走のシーンは、実はエリックとハロルドという2人の主人公達それぞれの人生のハードルを、

象徴に暗示していると解釈の方が意味深いといえよう。彼らは一体何のために走ったのであろうか？エリックは神の栄光のために走ることを望んだが、スコットランドの長老派教会の厳しい戒律のために、たとえ予選であっても日曜日（安息日）には走ることが許されないというハードルが出現する。ハロルドの前にはアンチ・セミティズム（反ユダヤ主義）とケンブリッジ大学の首脳達のスノビズム（紳士気取り）ともいえるエリート教育に基づいたアマチュアリズムというハードルが立ちはだかる。彼はこのメタファーとしてのハードルを跳ぶことでアンチ・セミティズムを克服しようとする。このようにハードル・シーンは2人の主人公達の生き方を象徴的に表現していると解釈できるのである。しかも、このハードル・シーンの意図的、象徴的表現は、媒介者としての役割を演じているリンゼイ卿が、実は架空の人物であるという事実に着目することによって、さらに一層確証できることになる。

歴史的事実として、映画『炎のランナー』の中でもハロルドとアンディが挑戦するトリニティ・カレッジの中庭で行われた「カレッジ・ダッシュ」に成功したのは、ハロルドではなくバーグリー卿という人物であり、1927年に彼は成功している。この成功について彼は「面白いからやった」(The Sunday Times, 1981)と語っている。実は、1924年のパリ大会で実在していた英国とニュージーランドの貴族のランナー達は、この映画に名前が出ることを許可しなかった。英国では映画は上流階級の人々には低俗な文化と見なされているためである。そのため、制作者たちはバーグリー卿のエピソードと彼のこの言葉を借用したのである。主人公達の走る目的と彼らの人生のハードルを対照させることによって、それらを浮き彫りにするために、リンゼイ卿という架空の人物を意図的に用いるという演出が行われたのである。それが一層主人公2人のランナー達の、それぞれの人生のハードルを際立たせる効果を持ち得たといえよう。

#### 6.2.1-(2) 身体強健なキリスト教徒

この映画では、エリックが走るすべてのシーンにおいて、彼が非常に楽しそうに走っている様子が描かれている。この歓喜に満ちたエリックの走るシーンは、実は宗教的次元から解釈される必要がある。つまり、エリックは「身体強健なキリスト教徒 muscular Christianity」として走ったのである。エリックの父は「身体強健なキリスト教徒が必要なのだ。神の御名のために走れ」と助言する。その言葉に従って、エリックは走るのである。その走りぶりは「天に頭をもたげ、体は後方に倒れんばかりであった」(Los Angeles Times,

1981)と評された。エリックは妹ジェニーに次のように話す。「走る時、神の喜びを感じる。勝つことは神を称えることだ」と。また、走り終わった後の信者たちへの説教のシーンでは「力は人々の内から湧きでるのです」と、人生訓として人々に諭すのである。

Oxford English Dictionary(1973)によれば「身体強健なキリスト教徒」という概念は次のように定義されている：「1857年頃からキリスト教の様々な考えや実践に対して用いられ(c.キングズリーの小説と関連して)、徳と真の宗教を実践するために身体の健康な状態の重要性を強調した」(p.1374)。この概念によって、19Cから20Cにおける英国のスポーツマンシップとフェア・プレーの精神という基本的原則が生み出されていく。このような精神は、近代オリンピックのような今日のスポーツの世界では、既に死語になってしまったことは衆知のことである。しかしながら、このような精神性は、エリックが肩車の騎馬として象徴的に表現された「火の戦車」によって、あるいはアナログカルに提示された「白馬の騎手」という概念によって、再考されなければならないと考えられる。この「白馬の騎手」は「誠実」および「真実」と呼ばれ、正義を持って裁き、また戦うとされている。エリックは400m走の勝利の後、ケンブリッジ4人衆によって騎馬のように担がれる。このシーンによって、彼は近代オリンピックにおいて待望されている新しき「白馬の騎手」であるかのように描かれていると解釈することができる。

### 6.2.1-(3) 映画のタイトルとテーマ

映画のタイトル『炎のランナー Chariots of Fire』というものの原意からして、非常に宗教的な象徴的意味が、既にこのタイトルに宿されているということに着目する必要がある。ただし、この映画のタイトルと内容には何ら関係が見られないという評論家(Sheila Benson)もいるにはいる(Magill, Frank, 1982)。残念ながら我々日本人にとって、邦題のタイトルから宗教的な意味を正確に理解することは難しい。なぜならば、『炎のランナー』というタイトルからして、「炎のようにファイトを燃やし、一生懸命走るランナー」という意味ぐらいしか伝わってこない。そのため、英語圏と同様の共示的意味が看取できないのである。さらに、我々日本人は、キリスト教文化自体になじみのある者が少ないため、当時の英国の宗教的風土を理解することもなかなか難しいことなのである。

プロデューサーのデビッド・ブットナムは、この映画のタイトルをウィリアム・ブレイクの宗教詩である『ミルトンの序章』から借用したと語っている。



持ってこい私に私の燃える黄金の弓を、  
 持ってこい私に私の願望の矢を、  
 持ってこい私に私の槍を、おお雲は開ける！  
 持ってこい私に私の火の戦車を！

私は心的戦いを止めはしない、  
 又私の剣が私の手の中で眠ることもないのだ、  
 我々がイギリスの緑で楽しい土地に、  
 エルサレムを建設し終わるまでは。

(W・ブレイク；ミルトンの序章：梅津濟美訳，1989；Stevenson, 1989) (傍点引用者)

ブレイクは非常に著名な英国のキリスト教の詩人であり芸術家である。この序文は英国の賛歌であり、英国の緑なす大地に「新しきエルサレム」を建設しようとする叫びとして解釈する必要がある。とりわけ、この宗教詩は、英国国教会でよく知られた賛美歌「エルサレム」として今も歌われている。この賛美歌は英国のキリスト教徒には非常になじみ深いものであるとされ、この映画の中ではハロルドの葬儀が行われるエンディング・シーンで歌われている。この賛美歌「エルサレム」はまた『長距離走者の孤独』という英国の別の名作にも挿入されていて、英国らしさを象徴するものと考えられる。Lucas(1982)によれば、この賛美歌はヒューバート・パリーによって1916年に作曲され、第1次世界大戦後に英国で流行し、現在では第2の国歌として知られているとされる。このような理由から、この映画のエンディング・シーンは、ハロルドの勝利とともに、彼が「真の英国人」として認められた象徴的表現であると解釈することができる。そのため、モンタギューの「彼は勝った He did it!」という最後の台詞は、ユダヤ人であるハロルドが最終的に勝利して、英国人を見返すとともに、その英国人に仲間として受容されたと解釈できるのである。

ところで、「火の戦車」の本来の意味は、旧約聖書の列王記Ⅱの予言者エリシャの行に登場する(新共同訳，1992)。ブレイクはこの1節に基づいて宗教の戦いの詩とエリシャが「火の戦車」に乗って昇天する絵を描いている。こうした事実を照らし、制作者達はエリックとハロルドという主人公2人を2台の「火の戦車」に見立て、不屈の精神と信念に基づいて、1980年代に新しき英国を再興し、英国の栄光を称えるという目的のために、2人の生き様を象徴的に描き出したと考えられるのである。このようなコンテクストに基づいて2人のランニング・シーンは描かれているのであり、この映像は主として宗教的な見地

から解釈される必要があるだろう。こうして初めて、この映像の主題が宗教的な栄光と身体強健なキリスト教徒の賛歌として表現されていることが理解されることになる。

ちなみに、この映画の制作のコンテキストとしては、1970年代のジョギングブームの影響による走る映画の登場、1980年のモスクワ・オリンピック大会において西側諸国66カ国のボイコット事件、1982年イギリスのフォークランド紛争、が挙げられる。表現されているコンテキストは1924年パリ・オリンピック競技大会。アマチュアリズムに厳しいケンブリッジ大学首脳、英仏のスポーツ界の対立、イングランド・スコットランド対抗戦、プロテスタント主義の戒律が厳しい時代、などである。

### 6.2.2 何のために走るのか：『長距離走者の孤独 The Loneliness of the Long Distance Runner』の社会的関与

『炎のランナー』という映画が上流階級がスポーツをする目的を典型的に表現している映像であるとすれば、下層階級がスポーツをする目的は『長距離走者の孤独 The Loneliness of the Long Distance Runner』という映画に表現されているといえる。両者は社会階層としては両極端に位置する。この『長距離走者の孤独』の原作は、1950年代後半から1960年代にかけて英国で起きた「怒れる若者たち angry young men」派のアラン・シリトー Alan Sillitoe (1973) の同名の短編小説である。この派は労働者階級を好んで描き過激な反社会運動を展開した。この映画はスポーツをメタファーにして反社会的な精神を映し出したものであると Bergan (1982) は述べている (p.101)。

佐藤 (1991) はこの映画を『炎のランナー』とともにスポーツを描いた三つの代表的な映画として取り上げている。彼は『炎のランナー』という映画はスポーツの理想と初心を最も見事に表現している作品であるとして高く評価するが、『長距離走者の孤独』という映画ではスポーツの扱いが皮肉なものになっているという (p.12)。

この映画の主人公コリン・スミスは生まれが貧乏であり、小さな時から盗みを繰り返している。彼は親の代から警官に追われて逃げ回るとい生活が常であり、逃げ足は早くしかも持久性がある長距離ランナーとしての素質がいつの間にか磨かれているという皮肉な設定になっている。ついにスミスは刑事に捕まり感化院 (ポースタル) に送り込まれることになる。感化院の院長はスポーツを用いて非行少年達を更正させようと意気込んでい。彼は「健全なる身体に健全なる精神を」というモットーの下に下手な精神分析よりも肉体の訓練を重視している。映画の冒頭ではスミスがサッカーのゲームで得点をし、院長

の目に止まる。スミスはヒョロヒョロで見るからにみすぼらしい体つきをした少年である。当時は、ブルジョア階級の富んだ家系の少年達だけがパブリック・スクールに通って、スポーツを享受できたのであり、富んだ者だけが体つきもスポーツによって鍛えることができた社会状況が映し出される。佐藤(1991)も指摘しているように、このスミスの体つきを映し出すことによって当時の社会状況への批判的表現となっているのである。身体強健なキリスト教徒の理想的な宗教的教育は下層階級には当てはまらないのである。

院長はスポーツと同様に歌も少年達の社会復帰のために活用する。コンサートも開かれ、少年達に「エルサレム」というあの英国で第2の国歌とまでいわれる歌を斉唱させるのである。この歌は上述したように、ブレイクの作詞した美しい英国の再生願望の宗教歌である。その高邁な理想と清らかな歌に反し感化院の院生達の暗さがあまりにも対照的に描かれ、歌の意味にそぐわない表現となっている。Bergan(1982)はこの対照性に気づいているが、日本人の映画評論家である佐藤(1991)にはそれがわからなかったようである。この曲は、この映画に一貫して流れるBGMとなっているが、主人公スミスが院外で自由に練習して走っている間のBGMにはジャズが用いられ、軽快なテンポが表現されている。BGMでも、トランペットのジャズ音楽によって自由、解放、自分自身のため、指図されない自主性、めくるめく快感などが表現され、他方「エルサレム」という賛美歌によって高邁な英国の理想、一斉主義、国のため、堅苦しさなどが重苦しく表現されている。その内にスポーツ・デイ(体育の日)が近づいてくる。近くの名門パブリック・スクールであるランレイ校とクロスカントリーの対抗レース(Borstal all-England Prize Cup for Long Distance Cross Country Running)が開催されるのである。院長は音楽会の後、このレースに勝って欲しいと皆にスピーチをする。そしてあの「エルサレム」を少年達に斉唱させるのである。

スミス少年は練習で好タイムを出し院長のお気に入りとなる。院長はスミスへの期待を高める。そのためスミスは監視なしで感化院の外で自由にランニングすることを許可される。彼は一人で黙々と、また美しい森の中を気持ちよさそうに走るのである。飛びはね、まるで踊るように走るそのシーンは、何ものにも強制されず、全く自由であることを表現している。ここでの走る目的は自由の満喫ということである。木々の中の陽光が輝いている。早朝の練習では、まだ空には月が残り地平線には太陽が昇る。朝靄の中をランニングするスミス少年。自然の中では自然に走る目的が表出する。走ること自体が自由で気持ちよく、そのことだけのために走っていることが美しいまでに描かれている。池の水面に少年のランニングフォームが美しく映し出される。

スミス少年が走っている最中にフラッシュ・バックして彼の過去を映し出す。家族のこと、母親の贅沢な生活ぶりなど、消費社会批判も強烈に描かれる。スミス少年は彼女との語らいの中で、「帰ったら何するの？」と彼女に聞かれ「生きるのさ、楽しんで」と答える。「大人になりたかったけど…」と彼女がつぶやく、といった会話が挿入される。Bergan(1982)はこのあたりの表現を指してフランスのヌーベルバーグの巨匠である F・トリュフォアの影響を受けていると解説している(p.102)。この「楽しんで生きる」というメッセージが下層階級には皮肉にしか響かないのかも知れない。

院長が「おまえは何をしたいか」と尋ねると「生きたい。物事をみること」と答えるスミス少年。ここには労働者階級が搾取されているイギリスの社会現実があり、それを何とかしなくてはというスミス少年の社会への抵抗感が表現されていると解釈することができる。シリトー(1973)の原作では表面的には適当にやって腹の中では院長を嫌悪しているというスミス少年の生き方が描かれている。院長はオリンピック選手になれば名誉なことだと言う。オリンピックは文明が生んだ最高の英知だとも言う。感化院の仲間達は一人で走らされているスミスに対して同情するし、またやっかみも持つ。スミスは仲間達に競馬馬みたいに訓練させられていること、院長がプロにさせたがっていることなどを語るが、仲間達の白々しい視線を感じている。

レースの日が来る。名門パブリックスクールであるランレイ校の少年達が上品な服装で現れる。このあたりの貧民層と富裕階級との対比、パブリック・スクールのスポーツの役割などは佐藤(1991)が詳しく述べている。若者達はロッカールームの中で交流して階級が違っていても若者としての同質性を発見するという社会批判も描かれる。このロッカールームで両校のエースが握手をし、部屋から出るときに互いに「お先にどうぞ After you」と譲り合うシーンがある。スミスが譲って後から出ることになるが、実はこれがゴール前の結末の伏線となっている。レースになるとスミスは強い。貧弱な体ではあるが断然トップでゴール近くまで戻ってくる。「このまま優勝だ」と喜ぶ院長を後目にスミスはゴール寸前で突然走るのをやめて立ち止まってしまう。院長や仲間、大人達が「走れ、走れよ、何やってんだ Run! Run! Come on!」と叫ぶ中、後続の選手達に抜かれてしまうのである。

「お先にどうぞ」とばかりに挨拶までしてランレイ校のエースを先に行かせる。そこでニヤリとほくそ笑むスミス少年のアップが映し出される。こうして院長の手柄となることを拒否し、彼の教育者としての偽善を暴き、院長の思い通りにはさせないスミス少年の社会へ反抗が成功することになる。エンディングは、強制労働させられているスミス少年と賛

美歌「エルサレム」のコントラストである。

スミス少年は一体何のために走ったのであろうか。トレーニングの間は自然の中で気持ちよさそうに自由を満喫して走っている。レースの本番では院長の思惑通りに使われたくなくてゴールを断固拒否するために走る。ここに社会と密接に繋がったスポーツする目的が描かれている。反社会運動の武器としてスポーツはメタフォリカルに利用されている。院長は社会的権威のメタファーである。スミス少年が勝つことは院長の利益となる。スミス少年が仕事もしないでぶらぶらしていたのも職に就けば雇い主という権力が利益を得るからであり、それに反抗していたからである。この映画は社会に対して怒れる若者達の抵抗心がスポーツを通して描かれている作品である。所詮スポーツはブルジョア階級の暇事なのであろうか。シリトー(1973)の原作には「感化院を建てた奴らや運動競技をののしってやる」(p.63)という下りが見られる。ここでは「スミス少年は何故走るのをやめるために走ったか」と問うべきなのかも知れない。

### 6.2.3 何のために勝とうとするのか：勝利至上主義社会

『フィニッシュ・ライン Finish Line』(Nicolella, John 監督, 1989)という映画はドーピング問題を描いたスポーツ映像である。この映画では「何故、薬物に手を出してまで人間は勝とうとするのか?」という問いを立てることができる(舛本, 1997b)。

「何のためにスポーツするのか」というスポーツする目的への問いは人間存在への根源的な問いに繋がる。そこで「勝つために」と答えたとしても、「それでは何のために勝つのか」という更なる問いが定立する。「勝つ喜びのため」「勝って誉められるため」などの回答にも、「勝つと誰が喜ぶのか、誰が誉めるのか」という問いをさらに続けることができる。自分自身?いや、友人、家族、国。様々なレベルで喜ぶ人間が存在する。実は、アスリートの勝利や活躍が過剰に期待される社会構造がそこに見られるのである。

また一方で、勝たないとその人の存在が認められなかったり、干されていく社会構造も見られるのである。そこではアスリート達はスポーツに全身全霊打ち込まなくてはならない事態が待ち構えている。そのような厳しい社会では「勝利至上主義」が蔓延し、勝つことの見返りとして、精神的、物質的報酬がその苦痛を癒してくれることになる。そのうち、勝つことが目的にすり替わり、「何が何でも勝たねばならない」、さもなければ、自己の存在証明も名声も地位も金も得ることができない。このような「勝利至上主義」社会に行

き着くことになる。勝つためには手段も選ばないような事態になると、「薬で命を縮めることが分かっている、薬に手を出してしまう」という事態がスポーツ界に生じてしまうことになるのである。

1988年ソウル五輪大会 100m 走のベン・ジョンソン選手のドーピング事件はまだ記憶に新しいのであるが、1994年広島アジア大会の中国女子水泳選手団、1996年の伊藤喜剛選手の事件、アトランタ五輪の女子水泳のミッシェル・スミス選手の疑惑など、その後もドーピングの事件や疑惑には事欠かない。IOCもJOCもアンチ・ドーピング・キャンペーンを展開しているが、選手と検査側のいたちごっこが繰り返されるだけであり、ドーピングは根絶されることがない。トップ・アスリート達の世界には一体どのような選手の心理と社会構造が伏在しているのであろうか。彼らは「何のためにスポーツをするのであろうか」。このような問いに関わる映像を分析していくことにする。

『フィニッシュ・ライン Finish Line』のオープニング・シーンは子ども時代のかげっこと大学生である現在のレースとがカットバックで繰り返される。子ども時代、主人公グレンが勝つと父親が抱き上げて祝福する。この時グレンは父のために走ったのであろうか？自分自身の楽しみのために走ったのであろうか？高校時代には名門大学のスポーツ奨学生となるため、大学では1984年ロサンゼルス・オリンピック大会の全米代表になるために、ひたすらに練習に励む。そうして勝たなくては意味がない世界にどっぷりと浸かり、本来の走る目的が見えなくなってくるのである。

主人公のグレンは白人の400mランナーとしてスポーツ奨学金をもらい、友人のティトと一緒に陸上競技の名門パシフィック大学に進学する。しかしながら、強豪揃いのチーム・メイトに押され記録が伸び悩むことになる。グレンの父親は往年のスポーツマンであり、今は建築家としてデザインをコンペで競っている。仕事も家庭まで持ち帰り、仕事でもスポーツでも何でも勝たなければ意味がない、という競争社会の原理を息子に見せつけることになる。コーチからの期待、父親の叱咤激励、ライバルへの焦りから、とうとうグレンはステロイドに手を出してしまう。友人のティトは、グレンがドラッグに手を出しているのを知り「楽しいから走るんだ」と論ずるのであるが、「ナンバーワンこそすべて」というスポーツ観を植え付けられたグレンは耳をかさない。結果は、ゴールした後のドーピング検査時に無知な薬物摂取によって心臓発作を起こして倒れてしまう。手術も実らずにグレンは死んでしまうことになる。ハリウッド映画には珍しくハッピー・エンドのストーリーではない。

簡単にドラッグが入手できるアメリカ社会も問題ではあるが、ここには追い込まれた若者がドラッグに手を出す心情がうまく描かれている。勝たねば干されるというトップ・アスリート達の置かれている状況が的確に表現されている。ここに社会的不正義として描かれているドーピングの背景にある勝利至上主義というものの原因は一体何なのであろうか？その答えの一つがこの映画ではスポーツ医学者の台詞に示されている。グレンの父親が息子が気がかりになり、スポーツ医学者に相談に行く。ドラッグの氾濫したスポーツ界の不正義な状況に対してグレンの父が「一体どうしたんだ」と聞くと「テレビだ」と医者は答える。つまり、テレビを見ている一般視聴者の興奮や期待を裏切らないプレーぶりがアスリート達に要求され、それが勝つためには手段を選ばないという態度を生み出しているというわけである。我々一般視聴者がスポーツに過剰な期待をかけすぎてスポーツを変質させたとこのスポーツ医学者は主張している。この医者は「ドラッグはスポーツの一部だ。それは人類の可能性を広げる」とも発言している。人間の身体に害がなければ、あるいは害を及ぼさないように薬物を利用することが正当化されている。しかし、この映画では主人公の死によって薬物依存のスポーツ界を告発する反語的なメッセージを送っている。スポーツ科学によるサイボーグ化とそれに対抗するスポーツ・ヒューマニズムの軋轢がこの映画には表現されているといえる。

この映画の公開は1989年であり、1988年のソウル・オリンピック大会のベン・ジョンソン事件の直後である。勝つことだけが全て、勝たなければ意味がない社会で、勝つことだけのために走る主人公グレン。それに対して、子ども時代のかけっこの勝利の象徴的意味との対照性が際だって表現される。子どもを自然に、薬物依存のスポーツ科学を人工的なものに対置させることにする。そうすると、グレンが自分の気持ちに正直に生きる場面、例えば彼女と馬に乗ってデートし樹上のトゥリー・ハウスで2人だけの時間を過ごすときは自然色で表現される。大学のトラックでコーチの科学的トレーニングやドラッグ使用は人工色である。主人公の純粋さや彼女への愛、純粋な喜びとしてのかけっこは自然性を象徴する。主人公の邪悪な心や反モラル、反スポーツマンシップ、嘘をつくことなどは人工的であること、人為であることを象徴的に描写する。

薬物に手を出す前の主人公グレンの寮の部屋に5色ではなく白色の五輪マークが飾ってある。この白色の五輪マークは何色にも染まる白色である。この劇映画では主人公はドーピングに染まり、黒色になるのであろう。また、彼の部屋の中の飾りの小道具にスピード・ゾーンと一方通行の交通標識が飾られている。陸上競技のスピード・ゾーンとのアナ

ロジーは理解できるにしても、一方通行の標識は薬物に手を出したらもう戻れない、ということ象徴的に表現しているのかもしれない。映画では小道具というものは全て計算されており、無意味な小道具は置かれないと考えるべきであるからである。選考会のレース後、ドーピング検査のところでグレンが心臓発作を起こした時に、係員が「たかがレースじゃないか It's only a race!」と何度も叫ぶのが残響とともに繰り返される。そう「たかがスポーツ」なのである。友人ティトがロサンゼルス・オリンピック大会の全米最終予選で優勝したことがテレビで映し出される。そのレース後のテレビのインタビューでティトは「亡くなった友人グレンのために走った」と語る。グレンは「勝つためだけに走り」そしてティトは「楽しむため」「友人のため」に走ったのである。グレンが陥った勝利至上主義がテレビのせいであるとされるのであるが、ティトの友情のメッセージもテレビに映し出されるこの皮肉。しかもこの映画はテレビ映画として制作されている。スポーツはテレビとは切っても切り離されない関係に陥っているのである。

このようなドーピング事件を題材にした映像から、その事件を引き起こさざるを得ない社会状況や選手を取り巻く状況を整理すると図 6-1 のように纏めることができる。

図 6-1. ドーピングをとりまく状況(p.232)

この映画の制作のコンテキストとしては、1984年ロサンゼルス・オリンピック大会以来の商業五輪の一層の進行、勝利至上主義社会の典型としてのオリンピック世界、テレビ中心主義社会の弊害、1988年ソウル・オリンピック大会のベン・ジョンソン選手のドーピング事件などが挙げられる。表現されているコンテキストは、1984年ロサンゼルス・オリンピック大会前の男子400m全米最終予選に向けた選手達の営みである。薬物乱用のスポーツ界やそれを取り巻く社会状況が映し出される。

#### 6.2.4 何のために闘うのか：反人種差別

##### 6.2.4 (1) 『炎のランナー Chariots of Fire』

『炎のランナー Chariots of Fire』(Hudson, Hugh 監督, 1981)では、既に見たようにハロルド・エイブラハムズがユダヤ人差別 (anti-Semitism) に抗して走ったのである。アンディ (アンドリュー・リンゼイ卿) にとって「走ることは遊びにすぎない」が、ハロルドには「闘いの武器」であった。ハロルドは何に対して闘うのかとシビルに訊ねられて「人種差



別を見返すため」と答えるのである。このように映画では社会的不正義としての人種差別に対する闘いが描かれることがある。『炎のランナー』の場合には、ハロルドは大学当局のお偉方から、ユダヤ人であることによる様々な偏見を受けるが、彼がその人種差別という障害を乗り越え、本当の英国人（"He is a real Englishman"というオペラ歌で象徴されている）として認められていく過程が描かれている。最後のハロルドの葬儀のシーンで、ハロルドの友人アンディが「彼は勝った He did it!」とつぶやく台詞と彼の葬儀が英国国教会で執り行われ、賛美歌「エルサレム」が歌われているシーンがハロルドの勝利を象徴的に表現している。「人種差別を見返すために走った」ハロルドであったが、それは自己実現でも自分のためでもなく、すべてが大英帝国の良き伝統の中に括り込まれ、まるで英国賛歌という大きな物語のために走ったと解釈されても致し方のないシーンであるともいえる。

#### 6.2.4 (2) 『ロンリー・ウェイ Running Brave』

『ロンリー・ウェイ Running Brave』（Everett, Donald S.監督, 1983）という映画は、1964年東京オリンピック大会の10,000m走で優勝したビリー・ミルズの半生を描いた作品である。彼はネイティブ・アメリカンの族の血を引き継いだ混血である。この民族性ゆえに、彼は何かと不遇な生活を余儀なくされ、有形無形の人種差別や偏見を被ることになる。ミルズは「一体何のために走ったのであろうか」。ここでは簡単に見ておこう。この映画は「自己の存在証明」という目的の節でも扱うからである。

ビリーは、高校時代は陸上競技の花形であるクロスカントリー・レースで好成績を収め、スポーツ奨学生としてカンサス大学に迎えられる。コーチのイーストンはインディアン（テキスト化では映画の中で用いられている「インディアン」という表記を用いる）の選手はすぐに投げ出してやめてしまうのでスポーツ奨学生として取りたくないという始末である。このような偏見に見舞われ続けるビリーであるが、走ることは楽しそうである。インディアンと白人の混血である彼は、人種を理由に陸上の会員制クラブにも入会できないという差別も受ける。学内の警備員からは「チーフ」と蔑みを込めて呼ばれ、誇り高いビリーは大いに怒る。また体に触られても怒るビリーが何度か映し出される。ビリーは「部族のために走る」と何度か語る場面がある。あるいはコーチのイーストンの「インディアン選手はすぐに挫折する」という発言に発憤し、それを見返すために走るのである。民族や人種差別を見返すという強固な闘いではなく、「部族のために走る」というのがこの映

画の前半部でビリーが走る目的なのである。妹を初め、ビリーに対する周囲の期待は大きい。「この居留地からは、皆出ていこうと思っても出ていけない。ビリー頑張ってオリンピックに出て」というビリーの妹の言葉が、居留地に囲い込まれているインディアンの人々の状況をうまく描いている。

部族のために走るビリーは、それ故に人種的な差別を受けやすい。大学対抗レースでイエローホースと走り勝つのであるが、レース前後の健闘をたたえ合って握手をするとチームメイトに「インディアン同士は仲良しだ」とからかわれて喧嘩にもなる。恋人パットの存在に癒され練習に励むが大きな試合ではどうもいい成績が残せない。パットに結婚を申し込むが、人種のせい彼女の両親にいい顔はされずに反対されてしまう。コーチや大学、あるいは奨学金を出している会社に利用されて走っているのではないかという思いもあって、走ることが楽しくなくなり、だんだん成績も悪くなる。とうとうビリーはコーチと対立してカンサス大学を辞め、居留地に帰ってしまう。しかし、居留地の子ども達はビリーを見て頑張ってオリンピックに出るように励ます。皆新聞を見てビリーのことを知っていて、部族の誇りとして期待しているのである。ビリーはこの居留地で兄のように慕っていた友人フランクと遊びながら走り回ることによってようやく走る喜びを再び見いだすのである。自然の中のランニングはそれなりに意味を持つ。人工のトラックでの走りはビリーには不得手という設定になっている。これはオープニングでビリーが大自然の中を馬と一緒に楽しそうに走っているシーンが伏線となっている。自然の中＝人間的な自然＝喜び・楽しみ・幸福という図式の表現内容である。

ビリーは再び居留地を出て海兵隊に入隊する。彼は走ることを特命とされて再び走り出し、選考会で2位となり東京オリンピック大会の全米代表に選ばれる。ここではビリーは再び「家族のため、部族のために走る」という設定になっている。ビリーは東京オリンピック大会の10,000m走では全く無名でマークされていなかったが、走行妨害されても不屈の闘志でもって走り、奇跡の大逆転劇を演じる。コーチのイーストン氏との和解の握手のシーン、エンディングの歓迎パレード、そこにたたずむ1人の老インディアンの姿。印象的なラストになっている。なぜ「チーフ」と呼ばれるとビリーは怒るのかが、このエンディングに集約されていると思われる。この老インディアンは「チーフ(酋長)」とおぼしき風体であり、ただ1人ビリーを出迎えているインディアンである。ビリーは歓迎パレードのオープンカーに乗って白人の側に歓迎されて進んでいく。しかし、この老インディアンはビリーとは逆の方向にゆっくり歩き去っていくのである。孤高の誇り高きネイティブ・

アメリカンとしての生き方がそこには象徴的に描かれている。

『ロンリー・ウェイ』の制作のコンテクストとしては、1976年モントリオール・オリンピック大会で10億ドルの大赤字が生じ、どの都市もオリンピック大会の開催を引き受けない時機であった。しかも、1980年モスクワ・オリンピック大会での西側諸国のボイコット事件があり、オリンピズムという理想が大きくゆがめられた時代であった。また、1984年ロサンゼルス・オリンピック大会前の状況、1970年代のジョギング・ブームの影響による走る映画の隆盛、が挙げられる。表現されているコンテクストは、1964年東京オリンピック大会であるが、ネイティブ・アメリカンの人達が不毛地帯の居留地に閉じこめられている時代のあからさまな人種差別の様子が映し出されている。

Zucker and Babich(1987)はこの映画を『炎のランナー』の2番煎じであるという(p.294)。人種差別に抗して走り優勝するという意味ではそうかも知れない。しかしながら、この映画では自己の存在証明やアイデンティティの確認という面が強く表現されているものもある(これは次節で検討したい)。ここでは、この映画のネイティブ・アメリカンのオリンピック大会への関わりやサポート体制に言及しておくことで、この映画の意図や制作のコンテクストが補強されることになる。

American Film(1983)によれば、この映画はカナダのネイティブ・アメリカンである Ermineskin Indian Band of Alberta によって資金提供されて制作されている。ネイティブ・アメリカンの地位向上・解放運動の一環として、初めての映画への投資であったとされている。ピリー・ミルズは白人とオグアラ・スー Oglala Sioux 族とのハーフであり、サウス・ダコタ州パイン・リッジの居留地で育っている(Bloom, 1991)。アメリカ選手団では1912年にホピ Hopi 族出身の Louis Tewanima がオリンピック 10,000m 走で銀メダルを獲得して以来、ミルズが初めての優勝者であり、それは今も変わらないほど、伝統的にこの種目に弱いとされる(Bloom, 1991)。ミルズはオリンピックでも全く無名でありノーマークの選手であった。世界記録からは1分も遅い自己ベスト記録しか出していなかったからである。それが優勝したので、ゴールした後に係員から「君は誰だ」と聞かれたという逸話があるそうである。また、当時の世界記録保持者であったロン・クラークはインタビューで「ミルズが気になったか？」と聞かれ「とんでもない。聞いたこともない選手だ」と答えたそうである(Bloom, 1991)。それほど無名であったということであろう。しかしながら、いくら無名の選手であっても、ミルズは映画の中で部族の皆に支えられ、また期待を一身に背負い「部族のために走る」という夢を持ち続けた。彼はその夢を叶えたのである。

## 6.2.4-(3) 『熱き瞳のままに：炎のタッチダウン Unconquered』

『熱き瞳のままに：炎のタッチダウン Unconquered』(Lowry, Dick 監督, 1989)という映画の舞台は 1955 年、アラバマ州。この映画は、黒人公民権運動の吹き荒れるディープサウスで、アメリカの自由のために闘った実在の 2 人の男、リッチモンド・フラワーズ・Sr. とリッチことリッチモンド・フラワー・Jr.の親子の物語である。

1950 年代、黒人虐殺、教会爆破、キング牧師の暗殺など激動の時代に、父は白人の検事としてたった一人で「人種差別」に立ち向かう。そんな父を持つがゆえに家族は皆迫害に会う。息子はそんな迫害にも耐え、また「運動は一生できない」と医師に宣告され、矯正靴まではいていた身体を克服し、ハードル走で好記録を出すまでになる(注 6)。本人はアメリカン・フットボールをすることが最大の夢である。ここで注意しなくてはならないのは、彼らは黒人として人種差別を受けている当事者の黒人達ではないということである。上流社会に位置する白人の名門一家なのである。様々な嫌がらせや苦悩を乗り越え息子リッチはフットボールに青春をかける。

映画の前半で矯正靴を川に放り投げ、走れる喜びをかみしめながら走るシーンがある。「何のために走るのか」という問いを許さないほど、人間としての喜びに満ちたランニング・シーンである。その後リッチは新聞社の息子であるアーニーと下層階級の娘シンディと友達になり、ハードル走に打ち込み始める。高校ではかなり良い記録を出すのであるが、このハードルは人生のこれから待ち受ける障害を暗示する象徴的表現である。先の矯正靴の象徴性とも合わせ、この映画の小道具として効果的に用いられている。この仕掛けは『炎のランナー』のハードルのシーンと共通する表現であるし『フォレスト・ガンブ Forrest Gump』(Zemeckis 監督, 1994)の冒頭のシーンに登場する矯正靴とも共通する演出である。数々の妨害を受けながら、アメリカン・フットボール部に入部できるがいじめに遭う。黒人達の迫害の様子とリッチ達へのいじめ、アーニーの自殺とキング牧師の暗殺など、主人公達のストーリーと黒人の公民権運動の展開とが歩調を合わせた物語進行となっている。

キング牧師の演説とリッチのハードル・レースのスローモーションの走りとの関連性も物語展開の効果を高めている。リッチは「いじめや差別と闘うために走り、ハードルを跳ぶ」のである。ここで少々長くなるが、この映画の中で引用されたマーチン・ルーサー・キング牧師のバトンルージュでの演説を引用しておく。セルマからワシントンへの大行進

の時の実際の演説である。映画ではこのスピーチにリッチのハードルの優勝シーンがスロームーションでかぶさっている。

先週の日曜日、我々はセルマから行進を開始したが、挫折すると言われた。また、脅された。「死体を乗り越えて行くしかない」と。だが我々はここに到着して、権力に負けないことを世界に示した。すべての反対を排除して進もう。これはアメリカ史に残る瞬間であり、栄光ある事件である。なぜなら、すべての人種、宗教の同胞がセルマに集まって勇気と正義を示したからである。我々は前進を開始した。教会を焼かれてもひるまない。前進を続ける。聖職者を殺されても止まらない。前進を続ける。勝利と行進とを力強く続けよう。住居や教育での差別を撤廃させよう。貧困を追放し、投票権を取り戻そう。気の遠くなるほど時間がかかるという見方もある。だが今日私は宣言する。いかに困難に見えていようと、それほど遠い将来ではない。真実の声は抑圧できない。虚偽の世界が減じる日は近い。我々の努力が報いられる日は近い。モラルと正義とがよみがえる日は近い。私には見える。主の栄光が訪れる日は近い。主の怒りが地上に現れて正義の稲妻が放たれるであろう。解放は近い。(ビデオ版日本語字幕より)

リッチ、アーニー、シンディの3人は英語の宿題で一緒に詩を暗記して朗読する。その時に用いられているのが *Invictus* (英語で *Unconquered*) という詩である。この有名な詩の作者は William Ernest Henley (1849-1903) という詩人・批評家であり、1875年の作品である(注7)。これはどんな逆境にあっても絶対にくじけずひるまずに闘うという運命との闘いの詩である。宿題の時には中間の節は朗読しないが、アーニーの葬儀では全文が朗読される。不屈の精神がこの詩によってこの映画のテーマとして語られるが、アーニーはいじめに疲れ果て、父にも話し相手になってもらえず、死の道を選択するのである。リッチは敢然といじめや人種差別に立ち向かう。また少し長くなるが「闘いのために走り、また闘いのためにフットボールをする」というこの映画の主要テーマと関係が深いため、この詩を引用しておくことにする。

### 詩「インヴィクタス」 *Invictus* = *Unconquered*

|              |                                     |
|--------------|-------------------------------------|
| われを包む夜の闇は    | Out of the night that covers me,    |
| 墓穴のように漆黒     | Black as the Pit from pole to pole, |
| 神が何であろうと     | I thank whatever gods may be        |
| わが不屈の魂に感謝する  | For my unconquerable soul.          |
| いかなる苦境に陥ろうとも | In the fell clutch of circumstance  |

われはひるまず泣かず  
運命から打撃を受けて  
血を流しても頭は下げぬ

I have not winced nor cried aloud.  
Under the bludgeonings of chance  
My head is bloody, but unbowed.

怒りと涙の世界の彼方に  
恐怖の影がおぼろに霞む  
脅威に慣れたわれは  
決して恐れを知らない

Beyond this place of wrath and tears  
Looms but the Horror of the shade,  
And yet the menace of the years  
Finds, and shall find, me unafraid/

門がいかにか遠くても  
いかなる罰が待とうと  
われは運命の支配者  
わが魂の主  
(ビデオ版日本語字幕より)

It matters not how strait the gate,  
How charged with punishments the scrolle,  
I am the master of my fate:  
I am the captain of my soul.  
(<http://www.columbia.edu/acis/bartleby/mbp/14.html>)

映画の終盤、リッチがアメリカン・フットボールの対アラバマ大学戦で試合開始前に、シンディから電報を受け取るが、その文面には"Invictus"という一語が書かれてあるのである。このようにリッチが不屈の闘志をもって社会の不正義や偏見と闘う様子が描かれている。また、リッチの前に立ちはだかるハードルは物語展開とともに発展・変化していくものである。それはあたかも具体的事物や事件が普遍的な不屈という人生哲学を象徴的に表現しているのである。その意味は、不屈の意志、強固な自尊心、家族愛などである。ではそのハードルの具体を辿って整理しておくことにする。幼少時の医者への宣言、矯正靴、高校生仲間のいじめ、ハードルとしてのダイニングのチェアー、公園でのハードル練習、コースに置かれたハードル（州記録を出したとき）、バトンルージュでのハードル競争のスローモーション、アメリカン・フットボールの試合におけるディフェンス（人種差別の強固な保守的社会的ガードとレイトタックルによる妨害）、タイムアップ寸前のディフェンス・ラインをダイブで乗り越えるハードルのクリアである。

#### 6.2.5 何のために復活するのか：自己ベストへの挑戦

『マイ・ライバル Personal Best』（Towne, Robert 監督, 1982）という映画はスポーツ（ここでは女子の5種競技）を通して若者の成長を描いている。舞台設定は1980年モスクワ・オリンピック大会に向けた全米予選のレースとそのための練習過程である。若くて荒削りだが才能を秘め将来性のあるクリスとベテランで練習方法も熟知しているトリーの2人

の女性ペンタスリーツ（5種競技者 pentathlete）はふとしたきっかけからホモセクシャルな関係に陥る。そのような関係から真の友情へと発展する人間関係、挫折した時のお互いの励まし合いなど、ここには多くの自己成長の物語が展開する。トリーのコーチと元金メダリストのデニーの合わせて4人が主要な登場人物である。コーチからの自立、新しい出会いと恋、激しいトレーニングと肉体賛美、練習の工夫と怪我。ここにはトップ・アスリート達がオリンピック大会を目指して必死に生きる様子が描かれている。特に、オリンピック予選の本番で緊張から失敗してしまうクリスと雨上がりの幅跳びで膝を怪我してしまうトリーが試合を諦めようとしたり棄権しようとした時に、彼女達が「一体何のために走るのか」という問いへの答えが描き出されている。

クリスは練習中にトリーのアドバイスがもとで膝の怪我をする。リハビリのトレーニングで水泳を利用するが、その時に元金メダリストのデニーと知り合う。新しい恋が始まり、信頼関係が生まれる。オリンピック予選の本番でクリスは緊張の余りハードル走で失敗してしまう。砲丸投げもファウルを多発し、2種目を終了したところでクリスは6位に位置する。モスクワ・オリンピック大会の代表枠は3人しかない。クリスは試合を投げようとする。そんな時、デニーは兄だと偽ってクリスに面会し彼女を激励する。このシーンにこの映画のメッセージの一つが集約されているのである。デニーは「問題なのは君と他人の実力を比べることじゃない。それは関係ない。大切なことは昨日の自分に勝ることだ。自分で自分の尻をたたけ。それでいい。やってこい」とクリスを激励する。そのことによってクリスは立ち直り、結局2位に食い込むのである。この映画に対する評論はあまり見られないが、その中でも Zucker and Babich (1987) および Ebert (1993) はこの自分との闘いというテーマには言及していない。彼らは女子5種競技の2人のアスリート達のホモセクシャルな人間関係に注目しているのである。この映画の原題"Personal Best"とは「自己のベストを尽くすこと」「自己最高記録を樹立すること」という意味である。その意味でデニーが試合を捨てようとしたクリスに伝えた言葉は重要な位置を占める。これまで怪我から立ち直り、復活してきたのも自分との闘いであった。ここにはあのクーベルタンの箴言、つまり「オリンピックで重要なことは、勝利することより、むしろ参加したということであろう。同様に人生で大切なことは成功することではなくて努力することであり、征服したということより、よく戦ったということでもあります。」(日本体育協会, 1987)というオリンピックズムの精神を類推させるシーンなのである。クリスはこのデニーの激励によって次の走り高跳びでは7cmも自己記録を更新するのである。それで上位に顔を出すことになる。

ここに映画の原題"Personal Best"というタイトルが集約的に表現される。邦題『マイ・ライバル』ではこのあたりの重要な意味が表現されていない。

他方、トリーは上位をキープしていたが、4種目目の走り幅跳びで雨上がりの走路で足を滑らせて膝を痛めてしまう。古傷がこの時に再発するのである。膝の痛みでトリーは棄権しようとするが、元気の出たクリスは今度はトリーを励ますことになる。クリスは「膝は痛むの？」とトリーの怪我を気遣う。「あなたに痛みがわかるの？」とクリスをなじるように答えるトリー。クリスはここで次のようにトリーに諭す。

クリス：やれるわよ  
 あなたにはできるわよ  
 できることはやらなくては  
 トリー：なぜ？  
 クリス：それが生きるということよ  
 さあ、走るのよ  
 モスクワは関係ないわ  
 あなた自身のために  
 さあ立ち上がって走るのよ  
 がんばって

(ビデオ版日本語字幕より)

この激励によって、トリーは最終種目の 800m 走に出場し、1 位になってオリンピック代表枠の 3 人の中に入るのである。しかし、そのオリンピックは幻の代表となるモスクワ大会なのである。しかしながら、2 人にはモスクワは関係ないのである。「自分のために走る。自分に勝つために走る。できることはする。それが生きるということである because that you are.」これらのメッセージが挫折しようとする選手の心の歯止めとなるのである。

「あなた自身のために走れ Run, it's for yours」というクリスの言葉は観ている者にも向けられた言葉である。

自己のベストを尽くすこと、原題"Personal Best"というタイトルがここにも重要な意味を持っている。1980 年のモスクワ大会ボイコットの中でも選手達は自分自身との闘いのために走るのである。その闘いができない人はレースを諦め、競技場から去らなければならない。このような強烈なメッセージがこの映画の冒頭の競技場のアナウンサーの場内放送、「競技者でない方はトラックから出て下さい」というアナウンスの挿入によって象徴されていると Harrison (1988) は指摘している (p.206)。それにしても、エンディングのアナ



ウンサーのナレーションが3人の選手達の健闘を讃えるのであるが、それは反語的にスポーツでの平和の難しさを伝えてもいる。「ブーチ、クリス、トリーの3人が代表に選ばれました。しかし大会はボイコット。本番はありません nowhere to go」と。しかしながら、2人の主人公にとって本番は既にあったのである。

制作のコンテクストとして、1970年代以降のジョギングブームの影響によって、走る映画が沢山登場していたことが挙げられる。走ることの意味や走ることの哲学も表現されていた。特に、1980年のモスクワ・オリンピック大会の西側諸国のボイコット事件が大きな社会的・政治的コンテクストであった。そのような中で、この映画は政治的な側面ではなく人間にとって自己ベストを求めること、自己実現することの意味を表現しようとした映画である。1980年のボイコットを受け、1984年のロサンゼルス・オリンピック大会前のスポーツ状況も制作のコンテクストとして挙げられよう。政治色、商業色が色濃くなったオリンピック大会が出現していた時代なのである。Ebert(1993)はこの映画に関してホモセクシャルな人間関係における信頼関係とトップ・アスリートに必要な完璧なまでのエゴイズムとが同じオリンピック代表を争うのに両立するのか、という人間の緊張関係が面白いと指摘している(pp.506-507)。また身体賛美の映画、身体運動の健康性あるいはいい汗をかくことを賛美する映画であると Ebert は指摘しているが、彼のこのような映画批評は走る目的性や自己のベストを尽くすこと、アイデンティティの確認という、より人間の根源的な生き方を問題にする視座には欠ける評論であるといえる。

### 6.3 スポーツ目的の形而上学

「何のために走るのか」という問いに対して「楽しいから走る」という答えは「楽しさ」の盲目的正当化につながると思われる。「何らかのためにスポーツすることが楽しい」という事態も存在するからである。楽しさには様々なレベルが見られるのである。また「楽しく」スポーツをするという次元も存在する。何らかのためにスポーツをするのであるが、それを苦しみながら嫌々やるのではなく、楽しくスポーツするということが可能なのである。「楽しさ」は目的でもあるがスポーツするときの条件にもなりうるものである。その意味でスポーツ映像に描かれている様々なスポーツをする目的を「スポーツの楽しさ」というものだけに還元することはできない。

また、スポーツ映像に描かれている人間の生き方、例えば不屈の闘志で差別や偏見と敢

然と闘って成功するリッチー・フラワー・Jr.の生き様、あるいは宗教的な信念に基づいて決して自分の宗教的信念を曲げずに貫き通しパリ・オリンピック大会で優勝するエリック・リデル、人種的偏見や差別にも負けないで再起しオリンピックのレース中の妨害にもへこたれず奇跡の大逆転を遂げたビリー・ミルズ、このような人間達の生き方の映像に感動する観客は多い。しかしながら、この「感動」という言葉には大きな問題が孕まれているのである。映像によってもたらされる緊張とサスペンス、ハラハラと息をのみ手に汗を握るような危機やせっぱ詰まった状況の連続、思わず固唾を飲むような瞬間、それらをクリアし成功をもたらした主人公の笑顔の瞬間の安堵感、物語がどう展開することになるのか気がかりになりながらも、肯定的な方向に結末が収まるのがこのようなスポーツ映像の一貫した表現形式である。しかしながら、それを観て「感動した」という一言ですべてを済ましてしまうことは、そのスポーツ映像に描かれていることを盲目的に肯定してしまうことになる。ここに描かれていることは一体本当なのだろうか？これはどこまでが本当なのだろうか？何を作者達は言いたかったのだろうか？あるいは時代考証は適切か？実際のスポーツ事象としてあり得るのか？こういった疑問や問いが「感動」の一言で閉ざされてしまう。「感動」という言葉はスポーツすることの目的への問いも閉ざしてしまう。しかしながら、スポーツには目的が必ず存在しなければならないというものではないのである。ここでは、スポーツ映像に描かれた哲学的メッセージを「楽しさ」に還元することなく、また「感動」という盲目的に受け入れてしまう観賞態度ではなく、もう少し深く検討してみたい。最初に自己の存在証明としてのスポーツする目的について、次いでスポーツには目的が存在するという自明性への懐疑について、走る映像をもとに解釈していくことにする。

### 6.3.1 スポーツにおける自己の存在証明

『ロンリー・ウェイ Running Brave』は人種差別に抗して闘うために走るという目的性の項で既に検討したが、この映画ではアイデンティティの問題がもう一つ大きなテーマとなっている。この自己の存在証明やアイデンティティの確認というテーマの存在は映画評論で言及されることがほとんど無い。

ビリー・ミルズはオルガガ・スー族と白人とのハーフであった。クロスカントリーの好成績でカンサス大学のスポーツ奨学生となって居留地から都会に出ていく。このことによってネイティブ・アメリカンの社会から出ていったのである。しかしながら、都会ではネ

イティブ・アメリカンとの混血であることによって完全に受け入れられることはない。恋人のパット以外の人々からの差別と偏見の中で生きているのである。ビリーは都会での生活ぶりを居留地の兄や友人のフランクに見てもらおうとして招待する。しかし、身内であると思っていた兄から都会の住まいの居心地が悪いと言われ、ネイティブ・アメリカンの側からも仲間外れにされようとするのである。白人社会からもネイティブ・アメリカン社会からも拒絶され、自分の休まる場所が見つからないビリーは自分自身を見失っていくのである。このスランプのシーンでビリーは妹に手紙を書く形で自分の心の状態を吐露する。一体何をしに都会に出てきたのかと自問し「勝つためにきたのだ」と言い聞かせる。それでもネイティブ・アメリカンとの混血であることが様々な偏見と差別を生むため、祖父がいつも話していたことを思い出す。「空を悠然と飛ぶ鷺は、地上が炎に包まれ降りる場所がないと一体どうするのか。鷺は羽を休める場所がない。それで鷺は飛び疲れて落ちるまで飛び続けるのである。」という話である。「自分も落ちそうだ」とビリーは妹への手紙に書くのである。白人社会にもネイティブ・アメリカン社会にもビリーは羽を休める場所を見つけられない。その内に「何のために走っているのかわからない。居留地に帰りたい」と思うようになる。自分の居場所はやはり小さいときから育ってきた居留地であるということなのであろう。カンサス大学での走りでは自分の居場所を見つけられなかったのである。居留地に戻り、大自然の中で遊び戯れながら走る楽しさや喜びを再び見いだすのである。その際、居留地の生活の中でビリーが兄達と一緒に太鼓を叩きながらラコタ語の歌と一緒に歌うシーンがある。ビリーは歌を全部覚えていて太鼓も叩くことが出来たのである。このことによってビリーは自分がネイティブ・アメリカンの側の人間であることを実感する。しかしながら、兄弟のように慕っていた親友フランクの自殺で再び白人の社会に旅立つのである。フランクの死で居留地にはいたくない。そうかといって、もうカンサス大学には戻れない。ビリーの心の傷を癒す場所は「走ることが仕事」となる海兵隊に入隊することであった。走る時に感じた気持ちよさを再び味わい、スランプの時に感じた「ただのビリーでいたい」と妹に手紙を書いたそのビリーは自分のために走ることで自己の存在を確認することができたのである。

ビリーが東京オリンピックの10,000m走で優勝し故郷に凱旋して大歓迎の出迎えを受ける。この時の歓迎パレードではネイティブ・アメリカンはただ1人だけが歓迎に来ている。この人物が誰であるかは特定することはできない。ビリーはその人物が気になり何度も振り返る。ビリーはオープンカーに乗ってパレードは進み始めるが、その謎の人物はその場

に止まったままビリーを見送る。最後はパレードとは逆の方向にゆっくりと歩き去るのである。ここにはビリーが白人サイドに受け入れられ、ビリーもその方向を選択したこと。また、謎の人物はただ1人でネイティブ・アメリカンを代表する存在であり、「チーフ的な存在」でもあること。そして彼はビリーとは逆の世界に生きていくのである。このエンディング・シーンでは、ビリー・ミルズがその後白人社会で実業家として成功し子どもを3人設けて幸せに暮らしていくという字幕が流れる。そしてエンディングに「自分の自由を勝ち取るために走った。長い長い孤独な道を lonely way」という内容のテーマ曲が流れるのである。こえが原題"Lonely Way"となっている。

ビリー・ミルズは走ることで自己のアイデンティティを確認しようとしたといえる。しかし、ほとんどのネイティブ・アメリカンの人々とは違って、特異な存在であったことがエンディングの謎の老人の姿は象徴していると解釈できる。

また、神の喜びのために走った『炎のランナー』のエリック・リデルは、その時に神の喜びを自分で感じた。エリックは走ることでやはり神のための宣教師としての自分の存在を確認したとも解釈できる。ハロルド・エイブラハムズは自分自身が反ユダヤ主義として差別される人間としてではなく、真の英国人(He is a real Englishman)として認められるために走ったのである。『マイ・ライバル』のトリーとクリスの会話の中にも自己の存在確認の表現が見られる。クリスが「やれるわよ。あなたにはできるわよ。できることはやらなくては」と言うと、トリーは「なぜ?」と聞く。するとクリスは「それが生きるということよ Because that you are.」とさらに説得する。この英語の台詞"Because that you are."の直訳「それはあなた自身であるということだから」という表現にこそ、アスリートの存在証明としての走るということが象徴的に表現されている。「あなた自身のために it's for yours、さあ立ち上がって走るのよ」とクリスが激励する中に、自分自身のために走ることが自分の存在証明となることが表現されているのである。この映画の「できることはする。それが自分であるということだ」というメッセージがここに集約的に伝えられているのである。

このように、スポーツ映像の中では主人公の存在証明やアイデンティティの確認というテーマが表現されている場合が見られるのである。そのためにスポーツをするという目的化に向けたスポーツ・イメージが形成されることになる。

### 6.3.2 スポーツの目的の自明性批判

ここまでは、走ることには何らかの目的や理由があるという立場でスポーツ映像が構成されている映画を中心に分析・記述・解釈を進めてきた。しかしながら、このようなスポーツの目的連関から逸脱した映像もある。いやそのような目的連関を批判するようなメッセージが表現されている映画も見られるのである。特に、スポーツ喜劇映画はこのような生真面目な目的連関を逆手に取ったメッセージを表現していることは既に第3章で検討してきた通りである。ここではスポーツ映画とはいえないかも知れないが、『フォレスト・ガンブ：一期一会 Forrest Gump』（Zemeckis 監督, 1994）を参照しておきたい。

この映画は 1995 年アカデミー賞で 6 部門を受賞した作品である。本邦公開は 1995 年であるが、アメリカではガンピズム Gumpisms という人生哲学に関する言葉を生み出したほど大好評を博した映画である。トム・ハンクス主演のフォレスト・ガンブは IQ が 70 程度と低いがイノセントなフール(天真爛漫な愚者)としてアメリカの歴史の中を駆け抜けながらカオスを引き起こすとともに、当たり前にも思われていた歴史や生き方に疑問をもたらし、再考するきっかけを観る人々に与えたのである。その意味では第3章で検討した道化の機能と同様の働きを果たしているのである。フォレストはアメリカ社会を駆け抜けるのであるが、そこには明確な目的など何もない。羽が風で舞うシーンがこの映画のオープニングとエンディング・シーンで用いられ循環する映像表現構造になっているが、一陣の風が吹き抜けることによって羽はどこに舞っていくかわからないのである。明確な行き先、スポーツする際の明確な目的などは見えないのである。このようなフォレスト・ガンブの疾走のシーンを整理しておくことにする。

(1) Run, Forrest, Run!というジェニー Jenny の叫びで遁走するフォレスト。悪ガキ達から懸命に逃走する。姿勢を矯正する矯正ギブス、母や古い価値観や強制からの逃走でもある。このとき矯正ギブスが瓦解して飛び散ることによって、自由奔放、イノセントで個性的なフォレストが誕生する。高校でも同様の構図が繰り返される。IQ が低くとも、グループ(1994)の原作では天才的な創造性を発揮するのである。

(2) 大学に入り、フットボールの試合で走るフォレスト。快足による痛快なフットボールのギャグ化が見られる。フォレストの猪突猛進型の走りっぷりと突然の方向転換。ディフェンスも予測がつかない走りの様子。チア・リーダー達もなぎ倒してしまう。ここには逃げなくてはならないような何ものもない。何のために走るのかも分からず、ボールを手渡されてひたすら走るフォレストの姿が表現されているのである。走る快感や楽しみも描かれない。不条理の走りである。2 回目のタッチ・ダウンのシーンではマーチング・バンド

のリーダーの直前で停止する。

(3) ベトナム戦争でも、ジェニーの言いつけを守り、ひたすら遁走する。フォレストは友人を、戦友を、上官を助け出してひたすら走る。それが勲章をもらうことにもなる。何かのために走るのではない。米国－中国の親善卓球試合でも、ひたすらボールを打ち続け、継続性を表現する。自然の流れにまかせ、歴史の重大事件を走り続ける。

(4) ジェニーがフォレストのもとを去った後では、彼は4年間ひたすら走り続ける。このシーンはグルームの原作には存在しない。原作ではプロレスと宇宙飛行士になるストーリーが描かれている。ここで、回りの人々はフォレストに走る理由を尋ねる。まるで宗教家のように黙々と走り続けるフォレストにテレビのインタビューは走る目的を尋ねるのである。黒人解放、女性解放、反戦運動などのように「人間のすべての行為には理由があるはず」という強い先入観がここでは表現されている。そのうち、突然に走ることをやめ立ち止まるフォレスト。一体この仙人の風貌をした人間は何を目的に4年間も走り続けたのかと、衆人が固唾を飲む中で、フォレストは一言「疲れた」と言って歩いて戻り始める。上記の走る目的が必ずあるという先入観の存在が強く否定されてしまう。時代的コンテクストとして1980年時代は健康ブームによってジョギングが全米で大流行した時代である。健康のため、減量のために走るという理由への寓喩となっている。この映像シーケンスは「何のために走るのか」という問い自体を超越する表現である。

(5) 愛するジェニーを追い求めて人生を「走り続ける」フォレスト。「人生は箱に入ったチョコレートのようなもの。食べてみるまで中身は分からない。」という母の教えをひたすら守り、何でも前向きに、天真爛漫かつ「聖なる愚者 saint fool」として正直に「邁進して走る」フォレストである。

(6) 人生とは、一枚の羽のように軽く風に左右されて漂うような、気まま、気まぐれなものかもしれないのである。フォレストの行く先は誰にも予測できない。一陣の風が吹き抜けるようにフォレストはアメリカ史という人生を駆け抜ける。

(7) フォレストはマジック・レッグ magic leg、魔法のような快速の足をもっていた。それは不条理なもの、誰にも走る理由を予測させないものである。映画の後半では、ダン中尉はとうとう義足(マジック・レッグ)を持つが、フォレストは生まれながらにして彼のマジック・レッグを持っていたのである。

以上のようなフォレストの遁走は、一体何からの遁走であり、何に向かったの快走なのであるか？そのような理由の詮索をも拒絶する無意味性がこの映画の本質的なメッセー

ジであるといえる。これこそ、アメリカの成長神話やアメリカン・ドリームという成功への邁進という「近代性の走り」を相対化し脱構築するようなフォレストの「走り」なのである。ここには人間の根元的優しさ、信頼、素朴さ、神、運命 destiny などが巧みに表現されている。邦題の副題である「一期一会」とはこの運命に身を委ね、風に吹かれるような漂う人生であっても、出会いは一回切りであるため真摯に大切に生きるということである。

このような無目的な疾走は「スポーツは何かのためにする」という生真面目な目的の存在の自明性を批判的に明るみに出すことになる。何にでも理由づけをし、社会的意義や意味をつけたがる社会の傾向に批判的精神を示すのである。純粹無垢、ナイーブ、オネスト実直で正直。このような天性の生き方によって、一体何が正しいのか自分なりに判断し、理解することもできるのである

キートンやチャップリンなどのスポーツ喜劇映像によって喜劇化されるスポーツのイメージで考察したような道化の機能は、フォレストの場合にも該当する。では、ノモス化した日常態のスポーツする目的性がフォレストの聖なる愚行によってカオス化されるとするならば、その本来的なスポーツの姿=コスモスの存在の可能性は一体どのようなものであるのか。『フォレスト・ガンプ Forrest Gump』はスポーツ映画でないため、ほんの少しばかりその可能態を映像の中に窺わせているのみである。

#### 6.4 目的化されるスポーツのメタ・メッセージ：スポーツドラマのフレーム・ワーク化

本章で見てきた映画はスポーツのドラマ映画が中心である。実在した人物が描かれていても、それは本当に実際あった史実通りの話とは限らない。ましてや純粋な記録の映画などではない。そうすると、これらの映画の中に表現されていることは実話ではなくて、制作者たちの創作によってテーマが描かれている、という認識のフレーム・ワークが構築される。「これはドラマ映画であって、本当のことは描かれていないかもしれない」という映画へのメタ・テキストが構成される。否定のメッセージへの自己言及のメッセージは再帰的に自己確認するメタ・メッセージを伴うことは第2章の方法論的検討のところで見た通りである。そのフレーム・ワークをここに当てはめると、「これはドラマであって本当の話ではない」というメッセージに対し「この中の話は本当に実際にあった話ではないのだろうか」と自己確認の認識の枠組みが構成される。そのことによって、翻ってスポーツ

の肯定的なイメージが形成されることにもなる。このようなフレーム・ワークによって、人間の真摯な生き様が再認識され、人間は何らかの目的のためにスポーツをするのである、というスポーツ・イメージが形成・強化される。これが図 6-2 のメタ・テキスト③によるスポーツのドラマ映画の認識フレーム・ワーク化であると考えられる。描かれている内容が「たかがスポーツ・されどスポーツ」および制作者側の「たかが映画されど芸術」という表現形式に関するフレーム・ワークは他のスポーツのイメージ化の方向で検討したと共通するものであり、それぞれメタ・テキスト①およびメタ・テキスト②を形作る。このような多重的フレーム・ワークを図示したものが図 6-2 である。

図 6-2 目的化されるスポーツのフレーム・ワーク (p.233)

因みに、『フォレスト・ガンブ Forrest Gump』では、その中に映し出す時代・社会のコンテキスト自体をも表現内容（テキスト）とする構造がとられている。例えば、ケネディ大統領の晩餐会に招待されてフォレストが握手をする場面、黒人公民権運動に事件の現場にフォレストが登場しテレビのニュースに写ってしまう場面、といった具合である。このことによって歴史の相対化が可能になり、ギャグ化が可能になるのである。また SFX を十二分に駆使して、メタ・テキストとしての映画のフレーム枠が斬新なものともなっている。そのことによって「たかがスポーツ」「たかが映画」「たかがテレビニュース」などのメタ・メッセージが容易には看取できにくくなっている。それらの否定的なメタ・メッセージによって「されどスポーツ」「されど映画」「されどテレビニュース」などの再帰的なメタ・メッセージの確認も難しくなるほどの、既存の映画の枠組みを超越した表現形式がこの映画には採用されているともいえる。

## 6.5 本章のまとめ

本章ではスポーツ映像において表現されている「何のためにスポーツするのか」というスポーツする目的に焦点を当てて分析・記述・解釈を進めた。ここでは、走るスポーツ映画、特に『炎のランナー Chariots of Fire』を中心として「何のために走るのか」というスポーツをする目的に焦点を当てて分析・記述・解釈が進められた。まず、(1)『炎のランナー Chariots of Fire』と『長距離<sup>ランナー</sup>走者の孤独 Loneliness of the Long Distance Runner』におけ



る社会的関与の面から「何のために走るのか」について検討した。上流階級のスポーツする目的と労働者階級の目的の差にも着目して解釈を行った。次いで、(2)「何のために勝とうとするのか」という視座から『フィニッシュ・ライン Finish Line』を解釈して勝利至上主義社会の存在とテレビ社会の持つ力を明るみに出した。(3)「何のために闘うのか」という視点から『ロンリー・ウェイ Running Brave』『熱き瞳のままに：炎のタッチダウン Unconquered』を取り上げ、反人種差別へのスポーツを通じた闘いという目的を明らかにした。続いて、(4)「何のために復活するのか」という点から『マイ・ライバル Personal Best』を取り上げ、自己のベストを尽くすことによって自己確認するという目的の存在を確認した。

以上のように多様なスポーツをする目的の存在を確認した後、スポーツをする目的の形而上学的な視点からの解釈を行った。スポーツを通してのアイデンティティの確認やスポーツにおける自己の存在証明を追求するスポーツ映像として、『ロンリー・ウェイ Running Brave』および『マイ・ライバル Personal Best』を取り上げて解釈を進めた。このような解釈によって、スポーツする目的の深層への視座が得られたといえる。しかしながら、一方で人間のスポーツ行動には何らかの目的や理由があるという自明性も疑う必要があることも確認された。『フォレスト・ガンブ：一期一会 Forrest Gump』を参照することによってこのスポーツする目的が存在するという自明性に対して批判的検討も行った。

このようなテキストおよびコンテキスト解釈の他に、スポーツのドラマ映画としてのメタ・テキストを整理し、「これはドラマであって本当の話ではない」というメッセージに対し、翻って「この中の話は本当に実際にあった話ではないのだろうか」と自己確認するという認識の枠組みが構成されること、またそのことによって、スポーツの肯定的なイメージが形成・強化されることにも通ずることが確認された。

付記：本章で主に分析に用いたビデオ作品は次の通りである：

1. 『炎のランナー Chariots of Fire』(Hudson, Hugh, 1981)〈イギリス映画, 119分, 本邦公開 1982年, CBS/FOX VIDEO 1991年版, VHS版〉
2. 『長距離走者の孤独 The Loneliness of the Long Distance Runner』(Richardson, Tony, 1962)〈イギリス映画, 日本VTR版 88分, ポニー・キャニオン販売, 原作 104min〉
3. 『フィニッシュ・ライン Finish Line』(Nicoletta, John, 1989)〈アメリカテレビ映画, 95分, Phoenix entertainment group制作, ビクター・ビデオ株式会社版〉
4. 『ロンリー・ウェイ Running Brave』(Everett, Donald S., 1983)〈アメリカ映画, 106分, 本邦公開 1984年, 東芝映像ソフトKK, VHS版〉

5. 『熱き瞳のままに：炎のタッチダウン Unconquered』 (Lowry, Dick, 1989)〈アメリカテレビ映画, 119分, CBS Entertainment Production, CBS/FOX Video 版〉
6. 『マイ・ライバル Personal Best』 (Towne, Robert, 1982)〈アメリカ映画, 128分, ワーナー・ホーム・ビデオ, VHS 版〉

## 注

注 1. このようなスポーツの定義やスポーツの本質的な理解とされることはよく見られる。例えば、岸野(1972)のスポーツの定義(pp.6-7)などが典型的である。多々納(1980)はこのような非日常性、自主的・自己目的的なスポーツ観を否定している(p.137)。このあたりのスポーツの「非日常性」概念や無目的目的性に関する考察は舛本(1983)を参照のこと。

注 2. 例えば、以下の評論を参照。Boyum, Joy C. (1981) Convincing evocation of the '24 Olympics, *The Wall Street Journal*, October 2, p.27; Canby, Vincent (1981) Screen: Olympic glory in 'Chariots of Fire,' *The New York Times*, September 25, p.c14; Bergan, Ronald (1982) Sport in the movies, *Proteus: New York*, pp.105-107; *The New York Times Film Reviews, 1981-1982*, pp.119-120, 1984; Magill, Frank (Ed.) (1982) *Magill's cinema annual 1982: A survey of 1981 films*, Salem Press: Englewood Cliffs, pp.101-104; Monaco, James (1992) *The movie guide. A Perigee Book: New York*, p.122; Nash and Ross (1985) *The motion picture guide*, Cinebooks: Chicago, p.398; *Film Review Publications (1983) Film review annual 1982*, Jerome S, OZER, Publisher, pp.175-190; Ebert, Roger (1993) *Roger Ebert's video companion (1994 Ed.)*. Andrews and McMeel: Kansas City, pp.111-112. これらの批評は肯定的な論評である。否定的な批評は以下の通りである; Stein, Elliot (1981) *The New York film festival: New film and retrospectives. Film Comment Vol.17-6 (November-December)*, p.61; *The New Yorker*, vol.57-36 (October 26) 1981, pp.176-178; *Village Voice's criticisms by Corrie Rickey and by Andrew Sarris in Film Review Publishers (1983) Film Review Annual 1982*, Jerome S. OZER, Publishers, pp.186-189. 一方、英国の映画評は肯定否定両方の側面を持った中立的なものである。以下を参照; *The Sunday Times*, "Running into history as the clock strike 12 twice," March 8, 1981, p.5; Brien, Alan (1981) *Why did Harold run?*, April 5, p.42; Rovinson, David (1981) *The kind of picture we have look for in vain*, *The Times*, April 3, p.11. なお、この映画の制作上の様子は次の文献が詳しい; Butcher, Pat (1982) *Chariots of Fire. Runner's World, Vol.17 (January)*, pp.59-64.

注 3. この映画の歴史的な研究については次の論文を参照されたい; Lucas, John (1982) *Origin of the Academy award film 'Chariots of Fire.'* *Olympic Message*, No.3 (September), pp.51-58. 映画論的研究では Stephen D. Mosher の二つの論文 *Sport movies grow up. JOPERD*, 53-2 (February) 1982, pp.35-36, および *Chariots of Fire: Some comments on the film. International Olympic Academy, Twenty-Eight-Session, 29th June-14th July, 1980. pp.184-187*; さらに Crawford の 2本の論文; Crawford, Scott A.G.M. (1985a) *Heroes of nations: Runner, racehorses and spacemen. The ACHPER National Journal, (Winter)*, pp.15-17. と (1983b) *The photographed athlete: Eadward Muybridge to Chariots of Fire. Olympic Review No.192, 193, 194 (October)*; そして Harrison, Walter (1984) *The uncertain glories of competition in Chariots of Fire and Personal Best. In Susan J. Bandy (Ed.) Coroebus triumphs: The alliance of sport and the arts: Proceedings of the*

first annual meeting of the Sport Literature Association, San Diego: San Diego State University Press, July, pp.203-207.以上を参照されたい。

注4. Crawford は教育手法としての幅広い可能性に言及している Scott A.G.M. Crawford (1983) *The photographed athlete: Eadward Muybridge to Chariots of Fire*. *Olympic Review* No.192, 193, 194 (October).

注5. 注2を参照。またエディプス・コンプレックスの視点から分析したユニークな研究もみられる。Neal, Steve (1982) *Chariots of Fire: Image of men*. *Screen*, Vol.23-4/4, (September/October), pp.47-53.

注6. この身体の不自由と矯正靴という足かせは 1995 年度アカデミー賞 6 部門を受賞した『フォレスト・ガンブ：一期一会 *Forrest Gump*』(Zemeckis, 1994)(日本では 1995 年公開)が有名である。映画は 1994 年公開であるがベストセラーにもなったグルーム *Groom*(1986)の原作の方が早い。しかしながら、あの矯正靴のシーンは原作にはない。映画の創作であるが、それがこの『熱き腫のままに：炎のタッチダウン』の借用かどうかは不明である。

注7. William Ernest Henley (1849-1903)英国詩作家、批評家、編集者。肺結核で入院し病弱であった。そのために強さ、不屈の精神に憧れたとされる(*The New Encyclopaedia Britannica* 15th ed. Vol.5, p.831.)。

## 文献 References

- 安彦周宜(編註)(1989) *Chariots of Fire*. 松柏社：東京。
- American Film (1983) *Newsreel: Native American enterprise*. *American Film* 8-4 (January-February):13.
- Bergan, Ronald (1982) *Sport in the Movies*. Proteus: New York, pp.101-102, pp.105-107.
- ブレイク(梅津濟美訳)(1989)ブレイク全著作集. 名古屋大学出版会：名古屋, p.861.
- Bloom, Marc (1991) *Olympic flashback: The greatest upset*. *Runner's World* 26-8 (August):22.
- Ebert, Roger (1993) *Roger Ebert's video companion 1994 edition*. A Universal Press Syndicate Company: Kansas City.
- Encyclopaedia Britannica Inc. (1988) *The New Encyclopaedia Britannica* 15th ed. Vol.5, Encyclopaedia Britannica Inc., p.831.
- グルーム(小川敏子訳)(1994) *フォレスト・ガンブ*. 講談社：東京. <Groom, Winston (1986) *Forrest Gump*. Perch Creek Realty and Investments Corp.>
- Harrison, Walter (1984) *The uncertain glories of competition in Chariots of Fire and Personal Best*. In Susan J. Bandy (Ed.) *Coroebus triumphs: The alliance of sport and the arts: Proceedings of the first annual meeting of the Sport Literature Association*. San Diego State University Press: San Diego, July, pp.203-207.
- 岸野雄三(1972) *スポーツの技術史序説*. 岸野雄三・多和健雄(編著) *スポーツの技術史*. 大修館書店：東京. pp.6-7.
- Los Angeles Times, September 20, p.23, 1981 参照。
- Lucas, John (1982) *Origin of the Academy Award film 'Chariots of Fire.'* *Olympic Message*, No.3

(September), pp.51-58.

Magill, Frank (Ed.) (1982) *Magill's cinema annual 1982: A survey of 1981 films*. Salem Press: Englewood Cliffs, pp.101-104 中の Sheila Benson (1981) *A film with the damaging title....* Los Angeles Times, September 8, p.28. を参照。

舛本直文 (1983) スポーツの「非日常性」概念に関する研究. 東京都立大学体育学研究 2-4:83-90.

舛本直文 (1995) 『炎のランナー』再解釈: スポーツ映像の象徴的意味. 体育・スポーツ哲学研究 17-2:51-64.

舛本直文 (1997a) 映画に学ぶスポーツ文化 3. 『炎のランナー』. 体育科教育 45-7:70.

舛本直文 (1997b) 映画に学ぶスポーツ文化 6. 『フィニッシュ・ライン』. 体育科教育 45-12:61.

The New York Times, September 25, C14:4, 1981.

日本体育協会 (監) 岸野雄三 (編集代表) (1987) *最新スポーツ大事典*. 大修館書店: 東京, pp.143-144.

佐藤忠男 (1991) スポーツを描いた三つの映画. 体育科教育 39-1:10-13.

新共同訳 (1992) 聖書. 日本聖書協会: 東京, p.586 (旧約).

The Shorter Oxford English Dictionary (3rd Ed.) Clarendon Press: Oxford, 1973, p.1374.

シリトー (丸谷才一・河野一郎訳) (1973) 長距離走者の孤独. 新潮文庫: 東京, pp.7-71. <Sillitoe, Alan (1959) *The loneliness of the long-distance runner.*>

Stevenson, W.H. (Ed.) (1989) *Blake: The complete poems* (2nd ed.) Logman: London, pp.490-492.

杉本厚夫 (1995) スポーツ文化の変容 - 多様化と画一化の文化秩序 -. 世界思想社: 京都, pp.50-62.

The Sunday Times, March 8, 1981, p.5 参照。

多々納秀夫 (1980) スポーツとスポーツ技術の意味と構造 - 特に社会学的視点から. 学校体育 33-2:137-138.

Weatherby, W.J. (1981) *Chariots of Fire*. Quicksilver Books Inc: New York.

Zucker, Harvey M. and Babich, Lawrence J. (1987) *Sport film: A complete references*. McFarland & Company, Inc. Publishers: Jefferson, NC.

981116 (6-1Doping)

スポーツとドーピング

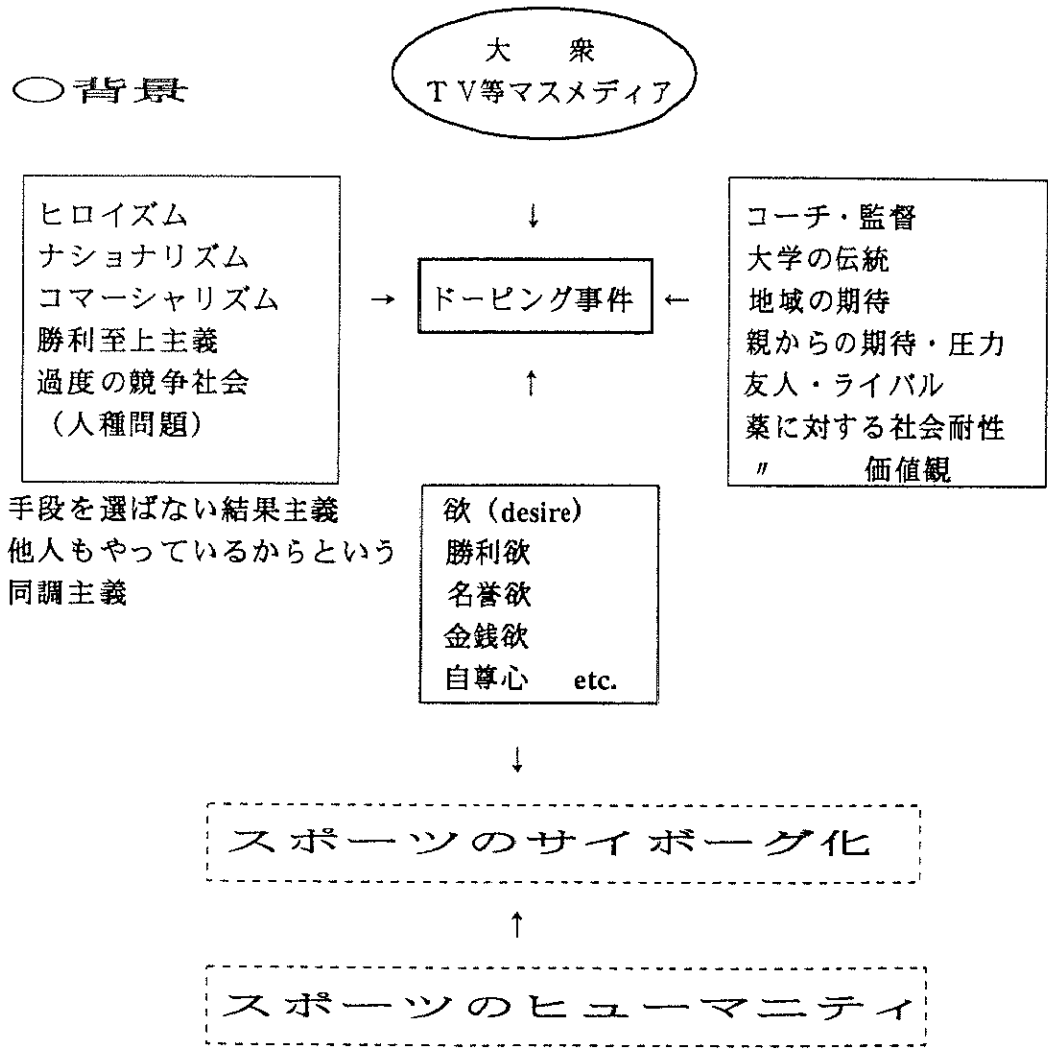


図 6-1. ドーピングを取り巻く状況

981116(6-mokutekiFrame)

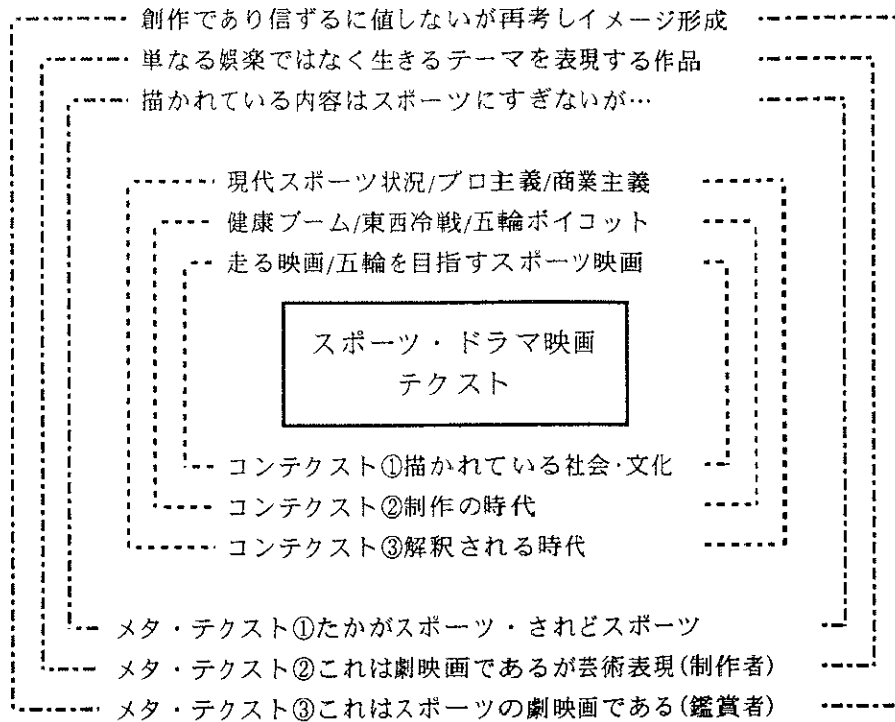


図 6-2. 目的化されるスポーツのフレーム・ワーク